

宋版『慈明四家錄』とその周辺

椎名宏雄

一、『慈明四家錄』について

- 二、石霜楚円の語録各本
- 三、楊岐方会の語録各本
- 四、白雲守端の語録各本
- 五、五祖法演の語録各本
- 六、結語

一、『慈明四家錄』について

『慈明四家錄』とは、慈明楚円—楊岐方会—白雲守端—五祖法演、と嗣承する四家の語録を集成した叢書である。慈明、すなわち石霜楚円（九八七—一〇四〇）は、また黃龍慧南をも輩出し、いわゆる宋代における臨済宗の黃龍派・楊岐派という二大門派を生んだ宗匠として、その禪宗史上の地位の重要なこと、いまさらいうまでもない。

この叢書は、巻頭に紹興二三年（一一五三）の序がおかれる

ことにより、そのころに編集され、刊行をみたことを知る。

それは、あたかも『黃龍四家錄⁽¹⁾』の巻頭にみえる紹興一一年（一一四一）の序文におくれること一二年である。『黃龍四家錄』四巻は、黃龍慧南—晦堂祖心—死心悟新—超宗慧方、と次第する四家の語を集成し、超宗と法兄弟に当る寂星慧泉の編集である。

一方、『慈明四家錄』の編集は、五祖法演門下の三仏と称される仏鑑・仏果・仏眼のうちの一、仏眼清遠に嗣いだ正堂明弁による。正堂は、『嘉泰普燈錄』一六や『五燈會元』二〇に略伝と語句を伝えている。⁽²⁾かつて雲門宗の妙湛思慧や黃龍派の保寧円璣に参じたことがあり、仏眼に契ったのちに圓悟克勤から印可を受けている。何山に住するや衆千指を数え、湖州道場山に移って化を揚げ、紹興二七年（一一五七）に七三歳で寂した。「頌古百則」を作ったとされるが、『慈明四家錄』の編集については所説がない。

いま、注目すべきは、おなじ仏眼の法嗣、竹庵士珪は、正山の贊成主その人である。贊成主によるこの仕事は、時の鼓山の住持である竹庵の命によつたと推定される。⁽³⁾つまり、正堂は『古尊宿語録』の編集事情やその内容については、すでに熟知していたはずである。このようにみると、すくなくとも、『慈明四家録』が編集される背景には、『古尊宿語録』『黃竜四家録』という二つの叢書が相ついで編集、刊行されるという歴史の流れの上にあることを、まず理解しておかなければならぬ。

さて、『慈明四家録』のテキストはきわめて伝本に乏しく、古版としては、天理図書館所蔵の尾欠本二冊が唯一のものである。もつとも、『建仁寺両足院藏書目録』中には、
慈明四家録 写 ⁽⁴⁾
と所録されるが、一冊中に四家の語すべてが筆写されているのか、または端本であるのか、該書を関する機会をえぬため、目下不明である。

いったい、本叢書は、刊行当初から伝本が稀であつたらしく、筆者の目睹するところ、各種の宋代以降の書目にも所録されず、重刊も改刻もまたなされなかつたようである。したがつて、天理図書館本（以下、天理本）は尾欠ながら、その存

在価値は大きい。ちなみに、わが正統蔵中、石霜の語録のみは『慈明四家録』から採られているが、原所蔵者は明示されぬ。

ところで、天理本については、『天理図書館善本解題』精神科学—仏教—に記されているが、ここでは書誌的な特徴についてのみ紹介しておこう。

卷冊（四巻）二冊（第四巻欠）

体裁 線装袋綴

表紙 改装後補縲色

題簽 左肩双边（刊）、墨「（書名）慈明錄

楊岐錄
白口「慈上等（丁数）（刻工名）」
〔白雲〕

匡郭 行格

白口「慈上等（丁数）（刻工名）」

有界 半葉一二行、毎行二七字

行格 半葉一二行、毎行二七字

有界 表紙

ナシ

表紙 識語

末尾、延宝七年、普門元照識

なお、右の『善本解題』は本書を“元版”とするが、これは何によるのであろうか。刊記はみられず、卷頭に紹興二三年（一一五三）の序があること、すでに述べたとおりである。

したがつて、本書が元版であるならば、紹興本の重刊ではなくてはならない。しかるに、その積極的な根拠はなく、むしろ、金子和正氏の「天理図書館藏宋刊刻工名表」⁽⁵⁾には、本書を宋刊本二一点の一として扱つている。刻工名は、印刻時期を決める最

も重要な資料である。したがつて、『善本解題』の記事は誤記と思われ、本書は紹興二三年（序）刊本そのものとみておきたい。

本書の伝承は、第二冊末尾にみえる元照の識語によつて知られる。

『慈明四家錄』（演禪師錄を欠く）⁽⁶⁾は、当山伝來の宝典なり。年代寢遠にして尙に紙蠹墨渝に至る。這回、補飾して焉に實く。

臨濟正宗正法山下栽松山高巖禪寺第四世嗣祖比丘普門元照合掌
識 敬（印）

延宝七己未年仏歎喜良日

高巖寺は、『禪宗濟家山城州正法山妙心寺派下寺院帳』によれば同名の三ヶ寺が記載されるが、目下、そのいずれかを確証できず、また普門元照の伝記も不詳である。ともあれ、延宝七年（一六七九）よりもかなり以前から、本書が高巖寺に伝来していたことを知る。

次に、本書の成立を知らしむる唯一の資料である章倧の序文を、訓読して掲げてみよう。

臨濟の宗風、特に天下に盛んにして、蓋しその兒孫、皆な鷹揚虎視せん。唯、慈明のみ卓絶逸群の韻を負い、氣は仏祖を呑みて鎌払之れ下し、凡聖を鍛錬して機用超脱す。諸方、未だ其の右に出する者有らず。臨濟の道、恢廊たり。

其の嗣子楊岐、三脚の驢に跨り、天下人を踏殺す。而して白雲・東山、其の宗を繼承し、無学の印を以て天下の衲僧の面門を

印破す。正法眼藏、向者に瞎驢邊に滅するも、其の綱要を持せるを観ば、日月を揚ぐるがごとく、後に之れ覽る者は、妖霧に堕して指南の車を獲るが如し。

道場の正堂弁公禪師、旧板の既に廃れ、斯の錄の伝なく、況んや今の末學は、但だ魚目を玩びて以て其れを真と為すを嗟く。豈に夜光を識る者かなと。特に工に命じて重刊し、之を目して『慈明四家錄』と曰う。庶幾、正統の宗、然く金剛の闇、栗棘の蓮、鉄酸の棊に墜ちざることを。是に於て燦然と前に列す。若し呑透せんと欲するも未だ常情を出でざるは、既に以て然らず。請う、斯の錄を閲せんことを。

紹興二十三年癸酉春の朔日に序す。⁽⁷⁾

文中、楊岐が三脚の驢に跨るとは、楊岐の語錄に付せられる楊傑の序文を承けるものであり、無学の印云々は、五祖の語錄中に道州無学を拈提するそれを指す。五祖における無字の拈提は、左朝奉郎の章倧をして、『慈明四家錄』の序文にまでふれさせるほど、當時としてはユニークだったのである。

ともあれ、右文によれば、序者正堂は、旧板がすでに廃れ、伝本がなくなつてきていたので、新たに重刊し、これに『慈明四家錄』の名を冠したというのである。そのとおりであれば、かれはすでに稀書となつていた四家個々の既刊書を苦心して集め、これらを新たに改刻したことになろう。かくし

て、新たに成った四家の叢書に対し、改刻直前に付せられたのが章宗の総序であった。

一応、右のような本書のテキストに関する性格をふまえた

上で、あらためて本書全体の構成次第を一覧表に掲げておこう。ちなみに、語録中の上堂・機縁・勘弁・偈頌・頌古などの点数を、語録の別に最下段に示した。

第一冊	内 容	撰 述 時	撰 編 者	点 数
一	慈明四家錄并序	紹興 23 (一一五三) 春・1	左朝奉郎章宗撰	
2	慈明禪師五会住持語錄上并序	天聖 5 (一〇一七) 10・1	智度山定林寺本延撰	
3	師初住袁州南源山広利禪院語錄		筠州黃梅山惠南編	
4	師住潭州道吾山語錄			
5	師住潭州石霜山崇勝禪院語錄			
6	師住南岳山福嚴禪院語錄			
7	師住潭州興化禪院語錄			
8	〔他の機縁〕			
9	勘弁			
10	偈頌			
二				
1	潭州雲蓋山会和尚語錄序			
2	題楊岐会禪師語錄			
3	袁州楊岐山普通禪院会和尚語錄			
4	後住潭州雲蓋山海會寺語錄			
5	楊岐会和尚後錄			
6	真勘讀弁			
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
16				
17				
18				
19				
20				
21				
22				
23				
24				
25				
26				
27				
28				
29				
30				
31				
32				
33				
34				
35				
36				
37	機縁	上堂		
38	機縁	上堂		
39	機縁	上堂		
40	機縁	上堂		
41	機縁	上堂		
42	機縁	上堂		
43	機縁	上堂		
44	機縁	上堂		
45	機縁	上堂		
46	機縁	上堂		
47	機縁	上堂		
48	機縁	上堂		
49	機縁	上堂		
50	機縁	上堂		
51	機縁	上堂		
52	機縁	上堂		
53	機縁	上堂		
54	機縁	上堂		
55	機縁	上堂		
56	機縁	上堂		
57	機縁	上堂		
58	機縁	上堂		
59	機縁	上堂		
60	機縁	上堂		
61	機縁	上堂		
62	機縁	上堂		
63	機縁	上堂		
64	機縁	上堂		
65	機縁	上堂		
66	機縁	上堂		
67	機縁	上堂		
68	機縁	上堂		
69	機縁	上堂		
70	機縁	上堂		
71	機縁	上堂		
72	機縁	上堂		
73	機縁	上堂		
74	機縁	上堂		
75	機縁	上堂		
76	機縁	上堂		
77	機縁	上堂		
78	機縁	上堂		
79	機縁	上堂		
80	機縁	上堂		
81	機縁	上堂		
82	機縁	上堂		
83	機縁	上堂		
84	機縁	上堂		
85	機縁	上堂		
86	機縁	上堂		
87	機縁	上堂		
88	機縁	上堂		
89	機縁	上堂		
90	機縁	上堂		
91	機縁	上堂		
92	機縁	上堂		
93	機縁	上堂		
94	機縁	上堂		
95	機縁	上堂		
96	機縁	上堂		
97	機縁	上堂		
98	機縁	上堂		
99	機縁	上堂		
100	機縁	上堂		
101	機縁	上堂		
102	機縁	上堂		
103	機縁	上堂		
104	機縁	上堂		
105	機縁	上堂		
106	機縁	上堂		
107	機縁	上堂		
108	機縁	上堂		
109	機縁	上堂		
110	機縁	上堂		
111	機縁	上堂		
112	機縁	上堂		
113	機縁	上堂		
114	機縁	上堂		
115	機縁	上堂		
116	機縁	上堂		
117	機縁	上堂		
118	機縁	上堂		
119	機縁	上堂		
120	機縁	上堂		
121	機縁	上堂		
122	機縁	上堂		
123	機縁	上堂		
124	機縁	上堂		
125	機縁	上堂		
126	機縁	上堂		
127	機縁	上堂		
128	機縁	上堂		
129	機縁	上堂		
130	機縁	上堂		
131	機縁	上堂		
132	機縁	上堂		
133	機縁	上堂		
134	機縁	上堂		
135	機縁	上堂		
136	機縁	上堂		
137	機縁	上堂		
138	機縁	上堂		
139	機縁	上堂		
140	機縁	上堂		
141	機縁	上堂		
142	機縁	上堂		
143	機縁	上堂		
144	機縁	上堂		
145	機縁	上堂		
146	機縁	上堂		
147	機縁	上堂		
148	機縁	上堂		
149	機縁	上堂		
150	機縁	上堂		
151	機縁	上堂		
152	機縁	上堂		
153	機縁	上堂		
154	機縁	上堂		
155	機縁	上堂		
156	機縁	上堂		
157	機縁	上堂		
158	機縁	上堂		
159	機縁	上堂		
160	機縁	上堂		
161	機縁	上堂		
162	機縁	上堂		
163	機縁	上堂		
164	機縁	上堂		
165	機縁	上堂		
166	機縁	上堂		
167	機縁	上堂		
168	機縁	上堂		
169	機縁	上堂		
170	機縁	上堂		
171	機縁	上堂		
172	機縁	上堂		
173	機縁	上堂		
174	機縁	上堂		
175	機縁	上堂		
176	機縁	上堂		
177	機縁	上堂		
178	機縁	上堂		
179	機縁	上堂		
180	機縁	上堂		
181	機縁	上堂		
182	機縁	上堂		
183	機縁	上堂		
184	機縁	上堂		
185	機縁	上堂		
186	機縁	上堂		
187	機縁	上堂		
188	機縁	上堂		
189	機縁	上堂		
190	機縁	上堂		
191	機縁	上堂		
192	機縁	上堂		
193	機縁	上堂		
194	機縁	上堂		
195	機縁	上堂		
196	機縁	上堂		
197	機縁	上堂		
198	機縁	上堂		
199	機縁	上堂		
200	機縁	上堂		
201	機縁	上堂		
202	機縁	上堂		
203	機縁	上堂		
204	機縁	上堂		
205	機縁	上堂		
206	機縁	上堂		
207	機縁	上堂		
208	機縁	上堂		
209	機縁	上堂		
210	機縁	上堂		
211	機縁	上堂		
212	機縁	上堂		
213	機縁	上堂		
214	機縁	上堂		
215	機縁	上堂		
216	機縁	上堂		
217	機縁	上堂		
218	機縁	上堂		
219	機縁	上堂		
220	機縁	上堂		
221	機縁	上堂		
222	機縁	上堂		
223	機縁	上堂		
224	機縁	上堂		
225	機縁	上堂		
226	機縁	上堂		
227	機縁	上堂		
228	機縁	上堂		
229	機縁	上堂		
230	機縁	上堂		
231	機縁	上堂		
232	機縁	上堂		
233	機縁	上堂		
234	機縁	上堂		
235	機縁	上堂		
236	機縁	上堂		
237	機縁	上堂		
238	機縁	上堂		
239	機縁	上堂		
240	機縁	上堂		
241	機縁	上堂		
242	機縁	上堂		
243	機縁	上堂		
244	機縁	上堂		
245	機縁	上堂		
246	機縁	上堂		
247	機縁	上堂		
248	機縁	上堂		
249	機縁	上堂		
250	機縁	上堂		
251	機縁	上堂		
252	機縁	上堂		
253	機縁	上堂		
254	機縁	上堂		
255	機縁	上堂		
256	機縁	上堂		
257	機縁	上堂		
258	機縁	上堂		
259	機縁	上堂		
260	機縁	上堂		
261	機縁	上堂		
262	機縁	上堂		
263	機縁	上堂		
264	機縁	上堂		
265	機縁	上堂		
266	機縁	上堂		
267	機縁	上堂		
268	機縁	上堂		
269	機縁	上堂		
270	機縁	上堂		
271	機縁	上堂		
272	機縁	上堂		
273	機縁	上堂		
274	機縁	上堂		
275	機縁	上堂		
276	機縁	上堂		
277	機縁	上堂		
278	機縁	上堂		
279	機縁	上堂		
280	機縁	上堂		
281	機縁	上堂		
282	機縁	上堂		
283	機縁	上堂		
284	機縁	上堂		
285	機縁	上堂		
286	機縁	上堂		
287	機縁	上堂		
288	機縁	上堂		
289	機縁	上堂		
290	機縁	上堂		
291	機縁	上堂		
292	機縁	上堂		
293	機縁	上堂		
294	機縁	上堂		
295	機縁	上堂		
296	機縁	上堂		
297	機縁	上堂		
298	機縁	上堂		
299	機縁	上堂		
300	機縁	上堂		
30				

1	白雲禪錄并序	太原王孜撰
2	江州承天禪院語錄	小師処凝編
3	江州円通崇勝禪院「語錄」	〃 海譚編
4	舒州法華山證道禪院語錄	〃 智本編
5	舒州龍門山乾明禪院語錄	〃 智華編
6	祖堂綱記序	
7	舒州興化禪院語錄	
8	舒州白雲山海會禪院語錄	
9	偈頌	
10	舒州法華山端和尚頌古一百十則	
11	自題	
12	（全欠）	

熙寧3（1070）	10	・	1
治平1（1064）	4	・	16
小師処凝編	〃 法演編	上堂	36
110則	59点	67	15等 45

太原王孜撰	小師処凝編	〃 海譚編	〃 智本編	〃 智華編
110則	59点	67	15等 45	上堂 36

五祖法演の語録を欠くのは遺憾であるが、みるとく、他の三家の語には、みないくつかの序文が寄せられる。かつて刊行された、それぞれの旧本の体裁をとどめるものであろう。

さて、周知のとおり、右の四家の語録類は、本書のほか正統の『古尊宿語録』中のものや、單行書として伝わるものなどがある。前者は、明代に増大する際にいちじるしく変貌する。したがつて、テキストとしての基礎的な吟味を経ぬまま、近代の正読藏や大正藏に収められた個々の語録類の多くは、実は歴史的に複雑な経緯と系統とを内に秘めているといえる。いま、こうした観点から、当面する四家の語録すべてを対象として、以下、文献整理を試み、成立以来の系統を明

らかにしたい。

二、石霜楚圓の語録各本

石霜楚圓（九八七～一〇四〇）は、汾陽に嗣ぎ、袁州の南源山、潭州の道吾山と石霜山、南岳の福嚴寺、潭州の興化寺、の五處に開堂した禪匠である。その一代の語録は、五處の語を集め『慈明四家錄』本をはじめとする三つの系統に分けられる。以下、それらの各本の所在を明らかにしておく。

△慈明禪師五会住持語録

①『慈明四家錄』所収、紹興二三年（一一五三）序刊、天理

② 続蔵一一二一一五一一、「石霜楚円禪師語錄」、明治四五

年（一九一二）刊

△慈明禪師語錄▽

③ 明蔵『古尊宿語錄』卷一一所収、万暦四二年（一六一四）

怪山化城寺刊

④ 続蔵一一二一一三一一二、「古尊宿語錄」卷一一所収、明治四五年（一九一二）刊

△慈明円祖師語錄▽

⑤ 宋版『続刊古尊宿語要』第一集天所収、嘉熙二年（一二三八）刊、天理・大東急各蔵

⑥ 写本、京大蔵

⑦ 続蔵一一二一一三一一五、「続刊古尊宿語要」所収、明治四五年（一九一二）刊

まず、①については、その構成次第はすでに掲げたごとく、天聖五年（一〇二七）に書かれた本延の序につづき、石霜の住した五處の語錄が配され、末尾に勘弁・機縁・偈頌を置く。黄竜慧南の編集であり、石霜に関する現存最古にして最大の語錄である。

②の続蔵本は、①を底本としながら、「石霜楚円禪師語錄」という編集書名を与えていた。半面、巻頭に『慈明四家錄』そのものの総序をも収め、本文には他本との校注が付せられるなどの長所も認められる。ただし、対校本は不明であり、

二つの差異は僅少である。

ここで注目すべき一本に、第三六回の『大藏会展観目録』中にみえる、両足院所蔵の左の刊本がある。

63、慈明錄（石霜楚円禪師語錄）二刊
(序) 章宗撰……紹興二十三年癸酉春朔日序

上巻本文（序共）廿一紙、下巻八紙（但し丁数は上下巻通じて附せられてゐる。）毎半葉十二行、一行廿八字、四周单辺、有野。⁽⁸⁾

右本の書誌的特徴を①の天理本と比較すると、若干の差異が認められる。まず、天理本の「慈明錄」は、巻頭に「……語錄上井序」とあるものの、上下巻の区分が明瞭ではない。

しかし、勘弁以下末尾まではたしかに八紙であるから、かりにこの八紙が分冊されていれば、下巻とみるのは自然である。両足院本にも、下巻という印刻はなかつたのではなかろうか。また、一行二八字は、天理本では二七~二八字である。さらに、四周单辺という匡郭が、天理本では第一七紙をのぞき、他はすべて子持ち線を有する左右双边であるという重大な相違点がある。

両足院本には、巻頭に紹興二三年の章宗による序文があるという。したがつて本書が、『慈明四家錄』の一部であることは、いうまでもない。天理本とは異版の関係にあるのだろうか。しかし、紹興二三年（序）刊本のほかに異本の存在を

傍証できぬこと、すでにのべたとおりである。のみならず、続蔵の石霜語録は『慈明四家錄』の第一によることを明示するにもかかわらず、次の楊岐以下の語はこれによらぬ。第二以下は採録しなかつたのではなく、採録すべきものがなかつたのであろう。だいたい天理本には、章宗の序文中に虫損で不明の文字が二字分だけある。これを続蔵では「以無」と印刻する。これらの事実は、続蔵の底本が天理本では断じてなかつたことの証左であり、両足院本であつたことの反証となる。さらにまた後述するごとく、両足院には明らかに『四家錄』中の楊岐語録だけを一冊とする端本をも所蔵する。したがつて、さきの「四周单邊」に疑問が残るもの、元来、天理本と両足院本とは同版であり、後者は石霜の語録のみを二冊とした端本、と考えておきたい。

(3)の明版『古尊宿語録』所収本は、(1)の天理本に比較すると大差がある。まず、序文と語録の説処別の内題はまったくみられず、語句の排列順を異にし、しかも語句は抄録である。末尾に置かれる偈頌も同様であるが、タイトルがより詳細となつていて、たとえば、「雲門云糊餅」が「因僧請益雲門超仏越祖之談」、「汝是慧超」が「因人請益慧超仏話有頌」のごとくである。同じく、卷首には天理本にみられぬ石霜の詳細な伝記を置く。内容を検討すると、この伝記は、『普燈錄』二、『禪林僧宝伝』一二、などの石霜条から採つて再編した

ようである。すなわち、本語録は、石霜語録の新たな編集といつてよく、本書の内容からは、決して原型を知ることはできない。その編集は、明蔵本『古尊宿語録』の編者によるものであろうが、本書に関しては良心的とはいえぬ。

なお、(4)の続蔵本は、(3)をそのまま翻刻したものである。

また、(3)も(4)も抄録ではあるが、同じ抄録である次の(5)との間には、直接の関係をみいだすことができない。

(5)の宋版『續刊古尊宿語要』本は、(1)の成立からは八五年後の刊行であるが、これも(1)と比較すれば大幅な抄録本である。まず、上堂語の部分は、説処の区分がなく排列順も異なる点は、さきの(4)続蔵本と同類である。また、勘弁以下の部分の分量を、(1)と対応すると次表のごとくなつてている。

	勘弁	機縁	機縁	
偈頌				① 四家錄本 ⑤ 続古尊宿本
37		3	1 2 3	24
11				14
			機縁	

右表のごとく、本書の特徴は機縁にある。すなわち、(1)の機縁三点と全同の文を収めた次に、(1)では偈頌の頃に属する二点と、石霜と楊岐との機縁一点を收めるからである。中間の二点は、実は都尉公が石霜に進呈した作品であるから、厳

密には機縁欄の方があさわしい。それはともかく、楊岐との次の問答を、『続刊古尊宿語要』は、どこから採録したのであろうか。

楊岐問云、幽鳥語喃喃辭雲入乱山時如何。師云、我行荒草裏、汝又入深村。岐云、官不容針、更借一問得麼。師便喝。

右の問答は、①の『慈明四家錄』本のいすれにもみいだすことができない。したがつて、他本から採録したのである。いったい、続古尊宿本中の語句には、①と異同する部分が若干みられる。これらのことは、⑤の依つた底本は①ではなく、①以前の古本であることを示唆する。あえて挙げるならば、①の首部に置かれる天聖五年（一〇二七）の智度山定林寺本延が撰する序文当時の初刻本か、またはこれを承ける宋版などに依つたのであろう。

⑦の続蔵本は、⑤そのままの翻刻であるが、⑥は『仏書解説大辭典』に所録される京大所蔵の写本である。京大には続蔵本の原稿写本を所蔵するといわれるから、これはおそらく⑦の稿本と思われる。

かくして、石霜の語録は、四家中では比較的に単純な三系統を形成して近代に至つていることが知られる。その系統図は、石霜以下の四家すべてをまとめて、本稿の末尾に掲示しておく。

三、楊岐方会の語録各本

楊岐方会（九九六～一〇四九）は、後代におけるその地位からみれば、袁州の楊岐山と潭州の雲蓋山の二處にしか開堂していないのは、やや意外ですらある。しかし、その一代の語録に関する成立や流伝が複雑な様相を呈するのは、やはりその立場を示すものである。楊岐の各語録は、全集、部分的なもの二種、抄録、の四種に大別できる。以下、各テキスト類を整理しておこう。

△楊岐語録▽

①『慈明四家錄』所収、紹興二三年（一一五三）序刊、天理・両足院各蔵

②『楊岐方会禪師語録』一冊、〔江戸期〕二西堂刊、駒大藏
△楊岐方会和尚語録▽

③宋版『古尊宿語録』第三策所収、嘉熙二年（一二三八）刊、天理・大東急・書陵部各蔵

④明蔵『古尊宿語録』卷一九所収、万曆四三年（一六一五）径山化城寺刊

⑤『禪學大系』祖錄一所収、明治四四年（一九一）一喝社刊

⑥写本、京大蔵

⑦続蔵一一一一三一三、『古尊宿語録』卷一九所収、明

治四五年（一九一二）刊

- ⑧大正藏四七、「楊岐方会和尚語録」、昭和三年（一九二八）刊
 ⑨写本、京大蔵

△楊岐会和尚後録▽

- ⑩統藏一一二一二五一一、「楊岐方会禪師後録」、明治四年（一九一二）刊
 ⑪大正藏四七、「楊岐方会和尚後録」、昭和三年（一九二八）刊

△楊岐会禪師語▽

- ⑫宋版『統刊古尊宿語要』第三集日所収、嘉熙二年（一二三八）刊、天理・大東急・書陵部各蔵

- ⑬統藏一一二一二三一五、「統刊古尊宿語要」所収、明治四五年（一九一二）刊

まず、①の『四家錄』本の構成次第はすでに掲げたごとく、「潭州雲蓋山海会寺語録」「袁州楊岐山普通禪院語録」「楊岐後録」の三語録の集成である。さいごのものには序跋も年記もないため、その編集と刊行の事情は不明であるが、前二者には、それぞれ僧文政と楊傑による序文が付せられ、その撰述年時も明瞭である。前者は、楊岐の示寂五年目の皇祐二年（一〇五〇）の撰、後者は、それから三九年を経た元祐三年（一〇八八）の撰である。

すなわち、楊岐の語は、まず白雲守端によつて編集された「雲蓋山語録」が早く刊行される。文政は序文の中で、楊岐の語は豊富であつたが抄録を許さなかつた、しかし守端が黙々と記録して一軸を成したこと、楊岐は俗齡五四歳で卒し雲蓋山に入塔したこと、などをのべる。一方、はるかに遅れて初刻をみた、保寧仁勇編する「楊岐山語録」の楊傑の序は、簡潔に過ぎて、編集の事情等は知るべくもない。しかも、『四家錄』本の分量でみると、「雲蓋山語録」は五紙半であるのに対し、「楊岐山語録」はわずかに二紙にすぎぬ。⁽¹⁾だいたい、楊岐は楊岐山に住すること六年ののち、慶暦六年（一〇四六）に雲蓋山に移り、三年後に寂する。したがつて、右の「楊岐山語録」の分量はあまりにも寥々たるものといえる。

楊岐三世の五祖法演の名声、その門下の三仏たちの活躍などにより、やがて全盛を迎える南宋期の楊岐派にとつては、その住山の名で呼ばれる派祖の源泉ともいいうべき「楊岐山語録」の分量が不満であつたことは、想像に難くない。この点に、あらためて「楊岐会和尚後録」が編集される必然性があつたのであろう。もつとも、この語録は楊岐山・雲蓋山二処の語を含むが、前者の語が大半を占める。分量的にも、『四家錄』本で六紙半を有し、前二者の語録の量にまさる。

さて、ここで両足院に蔵せられる『楊岐錄』（表題、墨書き）一冊を紹介しておきたい。筆者が調査したかぎりでは、この

古版は天理本『慈明四家錄』の楊岐錄の部分と全同である。

版式・丁数・刻工名など、すべて一致する。強いて異なる点を挙げれば、天理に比してやや後刷で、小型(10cm×13・2cm)のポケット版一冊に仕立てられていることである。すなわち、本書は紹紙二三年序刊『四家錄』の端本か、楊岐錄の部分だけの後刻本とみられる。

②は駒大所蔵の一冊本である。『禪籍目録』では二西堂の刊本と所録するが、該書には第一紙の背心下部に「米堂」と刻するほかは、刊記も版元もみられない。「米堂」も目下のところ不詳である。江戸期の木版本であるが、白文であるから、中国版の改刻本とみられる。

本書は、①に比較して「楊岐山語錄」と「雲蓋山語錄」の順序が入れかわり、楊傑の序が「楊岐山語錄」の後に置かれるほかは、ほぼ全同である。『四家錄』を直接に承ける版か、または未知の版が介在するかは不明であるが、『四家錄』同様、楊岐の全集本としては貴重な一本であろう。

③は宋版『古尊宿語錄』第三策所収本であるが、『古尊宿語錄』の初刻(一一三八~四四頃)の二〇家中の一であるから、その刊行は『慈明四家錄』よりも古い。ちなみに、慈明四家のうち、古尊宿二〇家に含まれるのは楊岐のみである。

本書は、『四家錄』本に比較して「後錄」を含まぬという大きな相違がある。また、文政の序が特別に大書されること、

楊傑の序題が「題楊岐会老語錄」とあること、形式的な字句が『四家錄』本より未整理であること、などの特徴がみられる。したがって、本書は『四家錄』本以前の古型を保持するテキストであり、おそらくは、楊傑が序を付した元祐三年(1088)刊本を承けるものであろう。「後錄」を含まぬのは、採録しなかつたのではなく、まだその成立を知らなかつたためであろう。

④の明蔵『古尊宿語錄』本は、③を直接に承けるようである。二つの語錄の内題・編者名などは完全に一致する。文字句もほぼ同一ではあるが、若干の相違も認められる。形式的には、上堂語ごとに改行されず、追込みのものがあること、順序の入れ替っているものが一点あること、二つの序文を巻末に移録すること、などが異なる。

なお、明蔵の編者は、本書を③の宋版『古尊宿語錄』第三策から採録する際に、誤って楊岐の語錄に続いて刻された「潭州道吾真禪師語要」の全文をも採録してしまい、その末尾に前述の「楊岐錄」の二序を移録した。⁽¹²⁾そのため、楊岐と道吾真の語の区分が不明確となつている。この④を底本とする⑦の続蔵本、⑧の大正蔵経本もまた、この誤りを踏襲している。

⑤の『禪學大系』本は、底本が縮蔵本『古尊宿語錄』なることを明記する。この縮蔵本は④の明蔵本を承ける。ただ

し、右の「道吾真禪師語要」を除去しているのは学問的といえる。ところが、⑤は二つの序文をも省き去り、そのかわりに「補足」として『禪宗正脈』から五点、『大光明藏』から一点の楊岐の語を集めている。『禪學大系』編集者の労は多とするが、どうやら「楊岐後録」の存在には気づかなかつたらしい。

⑥の写本は、『仏書解説大辞典』の所載⁽¹³⁾であり、⑦の続蔵『古尊宿語録』本の底本と思われる。⑦はいうまでもなく、前掲の④を承けている。

⑧の大正蔵経本は、底本が増上寺報恩蔵本の『古尊宿語録』⁽¹⁴⁾なることを明示する。「楊岐方会和尚語録」という題号は新たに付した編集名であるが、道吾真の語を含めたままであることは前述のとおりである。

⑨から⑪までは、「楊岐後録」⁽¹⁵⁾のみのテキストである。⑨の写本は『仏書解説大辞典』が所録する⑩の稿本とみられるもの、⑪は⑩を底本とする翻刻である。問題の⑩続蔵本は何を底本としたのであろうか。この点、内容を対照すると、「四家錄」本と二西堂本のいずれとも等しい。ただ、尾題は後者とのみ一致し、前者とは異なる。したがって、⑨続蔵本は「楊岐後録」を二西堂本から採録したものと思われる。「後録」を含まぬ部分は、すでに明蔵本の『古尊宿語録』から得ていたのである。

さて、⑫の宋版『続古尊宿語要』本は、その内題に「楊岐会禪師語前録収不尽者」とあり、この語が既刊の『古尊宿語録』本以外の語であることを示す。内容をみると、「楊岐後録」からの抄録であり、量的には約23を含む。排列順も「後録」のごとく整然と置かれず、上堂語類の間に勘弁が混在する個所もある。しかし、本書の底本としては、やはり『四家錄』本であろうと思われる。なお、⑬の続蔵本は、⑫の翻刻である。この⑬を『禪籍目録』が、「後録」と文に前後あれど内容は同一、と注記するのは誤りである。

以上、楊岐の語録類を整理したが、大きく三系統があり、いずれも続蔵に分断採録される点に、テキスト類の変遷の歴史が示されている。ともあれ、楊岐の語録の集成は、すでに宋版『慈明四家錄』で完了している。したがって、この叢書における楊岐の立場を正確に把握することが、その語録の成立や編集に関する問題点を解く大きな鍵となるであろう。この点については、後述する。

四、白雲守端の語録各本

白雲守端（一〇二五—一〇七二）は、楊岐と五祖を繋ぐ人として重要である。短命な生涯の間に、江州の承天・円通、舒州の法華山・龍門山・興化・白雲山、等の六處に開堂している。その現存語録類もまた、全集系、抄録系、及びそれらを

折衷した新編系、という三種に大別される。

△白雲禪錄▽

①宋版『慈明四家錄』所収、紹興二三年（一一五三）序刊、
天理藏

②続蔵一一二一二五—三、「白雲守端禪師廣錄」四卷、明
治四年（一九一二）刊

③『白雲禪錄』一冊、昭和七年（一九三二）以前孔版、東京
有村騰写板印刷所、駒大藏

△白雲端和尚語▽

④宋版『續刊古尊宿語要』第三集目所収、嘉熙二年（一二
三八）刊、天理・大東急・書陵部各蔵

⑤続蔵一一二一二三—五、『續刊古尊宿語要』所収、明治
四五年（一九一二）刊

△白雲守端禪師語錄▽

⑥明続蔵六一一、「白雲守端禪師語錄」上下二卷一冊、
康熙六年（一六六七）嘉興楞嚴寺刊

⑦続蔵一一二一二五—三、「白雲守端禪師語錄」二卷、明
治四五年（一九一二）刊

⑧中華大藏經二一九五所収、影印、一九六八刊

まず、①の『四家錄』本は、すでに構成次第を掲げたよう
に、処凝等の五名の編者によつて集められた六處の語錄と偈
頌・頌古、および、巻頭に付す太原の王孜による序、から成

る。王孜の序は、なぜか年記をもたないが、二州六会の語錄
を処凝が編し、上中下の三帙としたものに対して「白雲禪錄」
と命名した⁽¹⁶⁾、とのべる。処凝は白雲の法嗣で、舒州天柱処凝
とされる人であるが、機縁の語句も所伝も伝わらない。とに
かく、王孜の序によれば、五名で集めた白雲の語を、さらに
処凝が総集したのである。その時期は、白雲の寂後まもない
頃であったと推定される。

かくして成った「白雲禪錄」は三巻であった。あたかも、
『四家錄』本の竜門山語錄の末尾には「白雲語錄上」とみえ、
また、偈頌の前に「白雲禪錄終」の尾題が存する。これらの
刻記が前代の語錄の遺存だとすれば、三巻本の上巻は竜門語
録まで、中巻が白雲山語録まで、以下の偈頌・頌古・自題が
下巻ではなかつたかと推定される。つまり、①の『四家錄』
本は、王孜が書名を定め、刊行した際の原型をどどめる善本
といえるであろう。

②は四巻本の「廣錄」とするもので、江州承天語録から竜
門山語録までが巻一、祖堂綱紀序から白雲山語録までが巻二、
偈頌が巻三、頌古を巻四とする。①と比較すると、内容と排
列次第はほぼ等しい。注意すべきは、この続蔵本が“別行
本”と対校をなし、その異同一〇ヶ所の校注を記録すること
である。左にその校注部分と、①『四家錄本』、③孔版本の
各該当部分との対応関係を一覧してみよう。○は②本との一

致、×は不一致を示す。

② 続蔵本の校注（ページ）	① 四家錄本	③ 孔版本
(1) 得下別行本有悟後更須遇人始得八字 (20 5a)		
(2) 人下有若悟了遇人五字 (〃)	○ × × × × ○ × ○ ○	
(3) 什上一有箇十 (205c)		○ × × × × ○ ○
(4) 拍一作拈 (207b)		
(5) 脇一作隔 (208d)		
(6) 処下一有即又隨他声色所轉既隨声色所轉 即為意理所縛二十字 (209d)		
(7) 有上曾字 (〃)		
(8) 看下一有客來須看四字 (210b)		
(9) 然一作前 (215a)		
(10) 侶一作似 (215b)		

右表を読みとる限りでは、②は①と同一ではなく、①と別

本もまた異なる。ちなみに、右の対校部分は④以下の抄録本では原文のない部分があり、別本もやはり全集本なることを知る。その他、②では□となっている部分が①では文字鮮明という相違点もある。したがって、②続蔵本の底本は①ではなく、未知の「広録」四巻本の存在を考えるべきであろう。この未知の一本と“別本”的両者が、遠く①を承けることは想像に難くない。

さて、③の孔版本は無刊記であるが、駒大蔵本は昭和七年

(一九三一)に朝比奈貞一氏よりの寄贈書である。同書の符箋識語によれば、「本書は伊牟田文雄氏の依頼により印行せしものなりと、刊行年月は不明 右有村騰写版印刷所へ電話にて照会」とみえる。本書の内容は、①『四家錄』本に比して、巻末の偈頌と頌古の順序を入れ替るほかは全同である。注目すべきは、頌古の自題の末尾に左の一一一字を刻することである。

永徳元年季冬十五日 性雲置之

この一二三字は、おそらくは本書の底本に存在した墨書識語を忠実に油印したものであろう。性雲は不明であるが、南北朝ころの学僧だった人が。ともかく、本書は右により永徳元年(一一八一)の性雲筆写本を底本とする、比較的古い伝承本である。全巻に返り点と送りがなが付されるのは貴重である。テキストの系統としては、上の対校資料からも知られるよう、①にもっとも近い。

④の宋版『続古尊宿語要』所収本は、①に比較して大幅な抄録本である。すなわち、上堂法語等は①の一九四点中の八八点、頌古は一一〇首中の一二五首、偈頌は皆無である。また、排列順や語句の異同もすくなくない。したがって、本書の底本は①の『四家錄』本ではなく、むしろそれ以前に成立していた『白雲禪錄』三巻ではなかつたかと思量される。

⑤は④の翻刻で、内容に変りはない。

⑥は明続蔵に収録される上下二巻本であるが、①に比較し

て、これもかなりの抄録である。すなわち、巻上は上堂八八点、示衆三点、略伝、贊三点、巻下は頌古一一〇点、より成る。

就中、上堂語の八八点は、④『続古尊宿語要』本に全同である。特徴は頌古の部分にあり、全一一〇点を収め、しかも各則ごとの古則機縁が他本にみられぬほど詳細であり、排列順にも大差がある。かくて、本書は上堂語を④から、頌古その他を①から各採録し、これに編者の手が加えられて成った新編ということができよう。なお、⑧は⑥の影印本である。

⑦の続蔵本は⑥を底本とするが、巻頭で

正云く、上堂法語、既に『続刊古尊宿語要』卷三に載す。故に

今は再録せず。但収むるは遺る所者のみ。⁽¹⁷⁾（原漢文）と注記するごとく、すでに⑤に収録した部分を除いて翻刻している。そのため、巻上の分量は少なく、大半は巻下の頌古で占められている。

以上のほかに、現存本としては、『建仁寺両足院蔵書目録』中に入れる

白雲端禪師語錄 写⁽¹⁸⁾

の書がある。全集本系統か、または明統蔵の二巻本系統の鈔写本であろうが、未見であつて、詳しいことは今後の調査にまたなければならない。

五、五祖法演の語録各本

五祖法演（*～一一〇四）は舒州の四面山・太平山・白雲山海会院、蘄州の黃梅山（五祖山）、の四處に開堂した宗匠である。その語録は、天理本『慈明四家録』の該当個所が欠本のため、現存本は、宋版『古尊宿語録』所収の二種、明蔵本系の全集、および抄録本、の四種に分けられる。

△舒州白雲山海会和尚語録▽

①宋版『古尊宿語録』二五家本所収、咸淳三年（一二六七）

刊、成竇堂・北京図書館・国立中央図書館（台湾）各蔵

△黃梅東山語録▽

②宋版『古尊宿語録』二七家本所収、書陵部・成竇堂各蔵

△法演禪師語録▽

③明蔵『古尊宿語録』卷二〇～二二所収、万曆四三年（一

六一五）径山化城寺刊

④『校正重刻五祖演禪師語録』一冊、文政一二年（一八二

九）序刊、京都小川源兵衛、駒大蔵

⑤『五祖錄』一冊、写、松ヶ岡蔵

⑥『續藏一一一一二三一一』、『古尊宿語録』卷二〇～二二所

収、明治四五年（一九一二）刊

⑦大正蔵四七、「法演禪師語録」三巻、昭和三年（一九二八）刊

△五祖演禪師語▽

⑧宋版『続刊古尊宿語要』第三集日所収、嘉熙二年（一二三八）刊、天理・大東急・書陵部各蔵

⑨続蔵一一一一一一五、『続刊古尊宿語要』所収、明治四五五年（一九一二）刊

まず①は、『古尊宿語要』の初刻本二〇家を、鼓山の小菴徳最が淳熙五年（一一七八）に瑠瑤・白雲の二家を加えて二二家として刊行した際の、白雲の語に相当するものがこれである。台湾の国立中央図書館本は、さらにこの二二家に三家を加えて咸淳三年（一二六七）に重刊された一本であるが、あたかも瑠瑤と白雲の語が合綴されて、初刻のときの面影を伝え。五祖の語録としては、②とともに諸本の基礎となるので、その編成次第を掲げておく。

1 舒州白雲山海会和尚語録序 紹聖三年（一〇九六）三月、県事張景修撰

2 初住四面山録 参学才良編

3 次住太平語録 参学清遠編

4 次住海会語録 参学景淳編

5 舒州海会演和尚語録序 紹聖二年（一〇九五）一月二四日、県事劉跋撰

6 再序 紹聖二年一月一〇日、楊州錄事朱元荷撰

7 海会後録 参学智宣編

8 偕頌

9 刻記 「四明胡昶刊」

右により、五祖の黃梅山を除く三処の語が四名の編者によって集められ、これらに付せられた三つの序とから成つてゐることを知る。年記はすべて五祖の生前であり、その名声と囑望のほどをものがたる。三序とも、③の明蔵本以降に省かれる序題を有し、また張景修の序は年記をもつなど、古版の貴重性を示している。

しかし、三序の書かれた間隔はわずかに四ヶ月余であり、もつとも早い朱元荷のものでは「再序」とあって、さらに古い序さえも予想させる。また、劉跋の序には、圓悟が録した五祖の“語要”に対するもの、とあり、われわれの知らぬ語録の存在をも示唆する。ともあれ、張景修の序は、四面山・太平・海会の各語録を弟子が纂集したものに序し、これを世に伝えんとする、とあるから、当面の三処語録刊行の際の序とみてよい。なお、①本の巻末に刻される「四明胡昶刊」の五字は、咸淳三年（一二六七）に『古尊宿語録』が刊行された際の刻工名と思われる。

さて、②は同じく宋版『古尊宿語録』に追加編入した語録で、二七家本となつた際の刊行本である。編集次第は左記のとおりである。

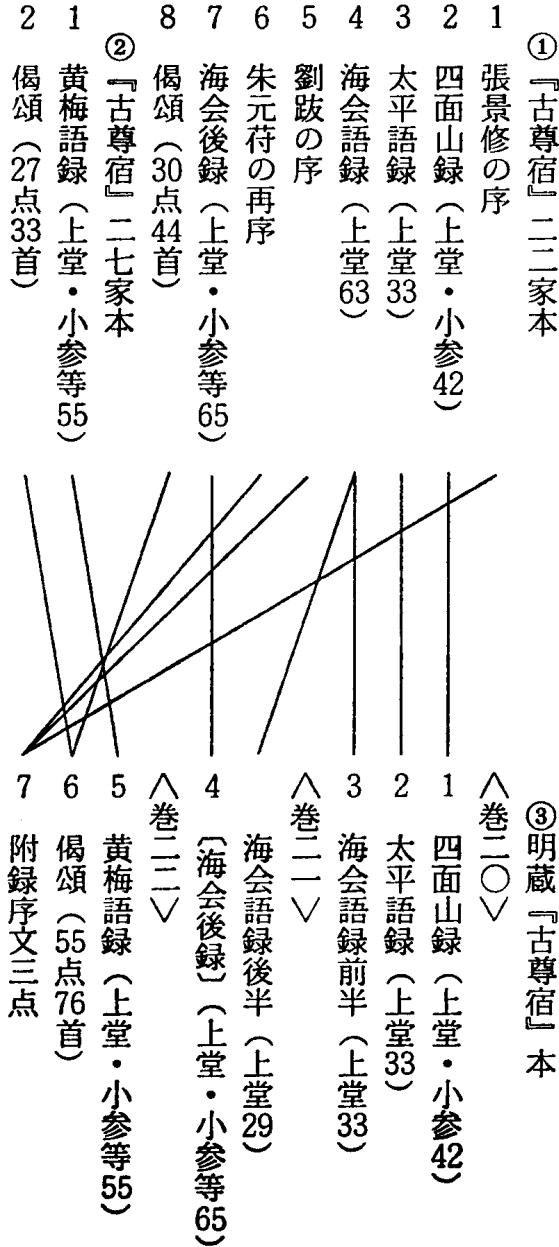
1 黃梅東山語録 門人惟慶輯

2 偕頌

3題 識

いうまでもなく、この語録は五祖の最晩年における黄梅山時代の語を集めたものである。惟慶については不詳であるが、五祖の門人であるから、五祖の示寂前後に集めたのである。偈頌も①に存するものとは別の作品で、重複はない。

問題は題識であり、「依雲居本統添東山録」慶元庚申正月十日識」と一行に刻される文字の意味である。雲居本なるものに依つて本語録を『古尊宿語録』に編入印刻したのが慶元庚



右の対照表において、海会語録の上堂語句が①と③では一点相違する。これは、①では第一〇番目に置かれる左の語句が、③にはみえぬからである。

上堂云、白雲不会禪、三門開向両辺。有人動著闕悞、両片東扇西

申（一一〇〇）だというのであらうか。雲居本も不明であるが、黄梅山とは楊子江をはさんで南方にあたる雲居山に伝承した一本を意味するならば、五祖—仏眼の法嗣に正賢・善悟・法如等が雲居山に住していることなどが思いあわせられるが、詳しいことは不明である。

③の明藏『古尊宿語録』本は、あたかも①と②の宋版を合巻したような編成となっている。これら三本の内容項目を対照すると、つぎのごとくである。

また、偈頌は①②の合計よりも一首少なく、また、同種の作品を並べたため、原型は知るべくもない。のみならず、「送仁禪者」と「寄太平燈長老」の二つは、誤ってタイトルと作

品が入れ替つてゐる。後に江戸期の④本は、宋版によつてその非を注記する。その他、③は海会語録を巻二〇から二一へ跨らせ、しかも海会後録の内題がないために、語録と後録の区分が不明確であるなど、形式的面の不備を指摘できる。

ところが、この③を底本としてそのまま翻刻したのが⑥の続蔵『古尊宿語録』本、および⑦の大正蔵本である。殊に後者は「法演禪師語録」なる編集名を与え、上中下の三巻に分つ。書名はともかく、この分巻は明蔵本の巻二〇と二二を事務的に上中下としたため、底本の不備をも踏襲している。

④は巻頭に文政一二年（一八二九）に書かれた妙峰玄実の序があり、本書が聖一国師の五五〇年忌を期して宋版との校讎を経て刊行された一本なることを知る。ちなみに、妙峰は東福寺二七一世に登つた人⁽²²⁾で、右序はほぼ絶筆に近い時期の作である。

本書は、全体的には③に近い。しかし、内容を精査すると、③と異なる点も少なくない。まず、③に欠けていた上堂語一点、偈頌一首が本書には存在する。また、海会後録の内題を「海会語録」と刻記し、その末尾の上堂語の順序が交替している。順序といえば、偈頌の排列順も、真讀四点が末尾に置かれる点は③と異なる。さらに、黄梅語録の末尾には「辞衆上堂」の一点が加わつてゐる。この上堂語は、現存諸本では後述の⑧宋版『續刊古尊宿語要』本の末尾にのみ見出

せるものである。

本書の資料的価値を高からしめるのは、全文に返り点と送りがなが付されるのみならず、巻末に四序を置くことである。就中、三序は①以下の諸本に等しいが、次の序は他本にみられぬ珍らしい一文なので、全文を掲げておく。（句読点筆者）

演公禪師、駕般若舟、載清淨衆、運香積供、伝極則禪、載斷楊岐、蹻翻海會、冒將前人公案、指他碧綠青黃、只要直下承當、不妨行住坐臥、諸方軌則、會為一家、如我門庭、無許多事。若然便薦得去、則絕離言說、超出聖凡、本来妙円、豈資添補。初參後學、輒求向上之機、法席叢林、或奏無聲之樂、積諸歲月、成此簡編、門人務欲流通、野客敬題序引。提不起處、昔聞、大庾嶺頭拳無尽時、今在白蓮峰上。

紹聖五年正月日

朝奉郎前知端州軍州事賜緋魚袋郭祥正序

みると、この序もまた前三序から二年ほどの紹聖五年（一〇九八）の撰述であつて、この年にも五祖の語録が刊行されたのであろう。文末にみえる白蓮峰とは、白雲山海會寺をいう。本書にこの序文が付録されているからには、④が対校本として用いた宋版に、それが存したのであろう。

かくして、④は明蔵『古尊宿語録』本を底本とし、これを紹聖五年の序を有する宋版、すなわち①や②とは異なる別本で対校をなし、五祖に関する資料を少しでも多く収録しよう

とした一本であつたと思われる。なお、⑤の松ヶ岡本は、④を謄写した一本である。⑥と⑦についてはすでに述べた。

⑧は、五祖の四處五種の語録全体からの抄録である。排列順も語録別ではなく、順序不同である。抄録の内容は、上堂80、小参1、問答12、頌古（実は偈頌）九点11首、であり、①②の宋版古尊宿本にみえぬものに、前掲の「辞衆上堂」と偈頌二首がある。⁽²³⁾したがって、本書の依った原本は、①②のはかに、おそらくは『慈明四家録』本があつたであろうと推定される。なお、⑨は⑧の翻刻である。

以上、五祖の現存語録諸本を整理したが、遡ってこれらの祖本、および、現在みられぬ『四家録』本の内容等について考えてみよう。それには、⑧の続古尊宿本（一一三八）のテキスト面での特徴が、大きな糸口となる。

この古版は、四處の語録を網羅し、①の『古尊宿語録』二二家本だけに存する上堂語、④の校正本のみに存する「辞衆上堂」、他本にまつたくみいだせぬ偈頌二首、などを含んでいた。これらの事実は、⑧の依つた原本としては、①の初刻本（一一七八）と②の初刻本（一一〇〇）、④の祖本である紹聖五年（一〇九八）の序をもつ古本、その他一本、の合計四本が予想される。これらのうち、紹聖五年序をもつ古本が、あるいは『四家録』本ではなかつたであろうか。

いったい、『四家録』は、各祖師に関する前代の語録を集

大成し、各全集を作ろうとする傾向がみられること、すでに前三家の場合に明らかであった。したがって、五祖についても、まず①と②の語録、すなわち舒州の三処と蘄州黃梅山の各語録が収録されていたことはたしかである。とくに後者の場合は、前に紹介した『四家録』の総序がいう、五祖における無字の拈提や趙州無学の偈頌が「黃梅東山語録」のみにみられることが、これを立証する。ただし、『四家録』（一一五三）は①②の成立に先行するから、収録語録はそれらの祖本であること、いうまでもない。すなわち、①の祖本である紹聖三年序刊本、②は雲居本かまたはそれ以前の古本、それに紹聖五年序刊本、の三本を収めたのである。

しかし、これでもまだ、劉跋の序（一〇九五）がいう圓悟の編集本の内容と、智宣が編集した「海会後録」の時期、などの問題が残る。劉跋は、すでに五祖は三処に宗印を掲げる二四年であるとのべるから、圓悟の編んだ五祖の語要は、⁽²⁴⁾黃梅山のものでないことは確実である。圓悟は、『圓悟禪師伝』によれば、海会寺で五祖に参じて大悟嗣法ののち、五祖に随侍して黃梅山へと移る。したがって、圓悟の編集は海会寺語録だけであったのではなかろうか。また、「海会後録」は「黃梅録」とともに序文が伝わらぬため、その成立事情が不詳であるが、同じ“後録”でも楊岐の場合とは異なり、文

が、あるいは「海会後錄」かもしだれないが、序文からはそれもうかがえぬ。いずれにせよ、五祖の海会寺時代に、何種もの語錄が編まれ版行されていたことには、いまさらながら驚くのがほかない。

かくして、五祖の語錄各本の系統は、四家の中でもっとも複雑な様相を呈する。末尾の系統図に示すとおりである。

六、結語

以上、『慈明四家錄』を中心として、四家個々についての語錄諸本の系統を整理してきた。その過程で考察されたことがらを、さいごにまとめておきたい。

まず、『四家錄』と『古尊宿語錄』正統書との関係であるが、法系的に近接関係の編者によつて編まれたこの二叢書について、直接の関係は楊岐と五祖の場合にしかうかがえなかつたのは、やや意外である。もつとも、編集の意図をまったく異なる叢書同志ではあるが、『四家錄』の編者正堂は、

初刻本『古尊宿語錄』を熟知していたはずであり、重刊以後の『古尊宿語錄』正統書も、『四家錄』を知らぬことはなかつたはずである。ことに、『続古尊宿語要』は、『四家錄』をあまり重視せぬ傾向がみられる。それはなぜであったのだろうか。

いったい、『四家錄』の中心は楊岐と五祖にある。本書は

先行する『馬祖四家錄』『徳山四家錄』『黃龍四家錄』などの名称を踏襲するが、直接にはつい先ごろ成った『黃龍四家錄』（一一四一年刊）に刺戟されて成立したとみられる。その背景には、北宋末期における黃龍派の盛行にとって替らんとする、

楊岐系統の躍進があつた。すでに五祖門下は三仏を中心として各地に活躍し、とくに圓悟・大慧の父子は五山十刹へと進住し、名声を博していた。それは、南宋期に絶大となる官寺中心の禪林盛行を迎える幕明けの時期であつた。『正法眼藏』（一一四七）は成つたばかりである。前述のことく、『四家錄』の総序が、楊岐の活躍、五祖の無字拈提と並んで、とくにこの書についてふれていてゐるのを想起したい。

かくて、従来の黃龍派にとって替らうとする勢いの楊岐一派にとって、前者の『四家錄』の編成をみて、それを凌駕する自派の『四家錄』を編んだのは自然のなり行きであつた。そのためには、黃龍の師である石霜を含ませ、あえて『慈明、四家錄』と名づけた。いうまでもなく、黃龍より一代遡つて臨濟宗の正系が楊岐……五祖にあることの主張にほかならぬ。こうした意味で、本書はまさしく“燈史的語錄集”といふ性格の書とみることができよう。

五祖については、『四家錄』の今本が欠くため、確たることとは不明であるが、楊岐に対しても特別な扱いをしたようである。すなわち、まず全語錄の総集をはかつた。編者の不明な

「楊岐後錄」をも編入せしめた。一つの仮説をたてぬならば、この「後錄」は『因家錄』全体の編者である正堂の編むといふではなかつたか、されば思われる。楊億の序題である「題楊岐会老語錄」を「題楊岐会禪師語錄」と改め、これを前へ移項するなどの編集がうかがえるからである。古く語錄の原典を重視しようとする傾向が濃い『続古尊宿語要』の編者が、あえて『因家錄』よりも古い資料を用いているのは、こゝにうした『因家錄』の成立状況を知つていただからである。本書の“重刊”を文字通りに信ずるにとばやきない。

『因家錄』は重刊わかれわるいとなへ、やがてほととんどの原本を絶つ。楊岐派が主流となる南宋以降の禪林が、もはや本書を必要としなくなつたからである。そこには、時代の産物としての本書の性格が秘められてゐる。

注

- (1) 続蔵一一一一一に収録されたが、その底本は不明。
- (2) 『嘉泰普燈錄』一巻 (Z. 2Z, 10, 2-124c~126a) 『五燈会元』 11〇 (Z. 2Z, 11, 4-391b~392a)
- (3) 抽稿「古尊宿語錄」正続諸本の系統」 (『曹洞宗研究員研究生研究紀要』 111)
- (4) 『昭和法宝総目錄』 3-984a
- (5) 『書誌学』復刊新111
- (6) 加賀國河北郡、京都吉野郡垣内村、丹羽園の111ヶ所である。
- (7) Z. 1, 2, 25, 1-81a

- (8) 『大藏会展観日録』(昭和五六六年、文華閣) P510b
- (9) 『嘉泰普燈錄』11(Z. 2Z, 10, 2-25c~26c)、『禪林僧目』 111 (Z. 2Z, 10, 3-261c~263c)
- (10) 『仏書解説大辞典』4-320b
- (11) 阿部肇一『中國禪宗史の研究』P418~420 参照
- (12) この事実は、すでに柳田氏の労作「古尊宿語錄考」(『花園大学研究紀要』11、及び「禅学叢書」1)、『無著古尊宿語要』附錄)において指摘されてゐる。
- (13)(15) 『仏書解説大辞典』11-158c
- (14) 『昭和法宝総目錄』1-513b
- (16) 『続古尊宿語』11〇 (T. 51-597c)、『續燈錄』四巻 (Z. 2Z, 9, 1-13a)
- (17) Z. 1, 2, 25, 3-191a
- (18) 『昭和法宝総目錄』3-982a
- (19) この国立中央図書館本については、阿部隆一「中華民國立中央図書館等蔵宋金元版解題」(『斯道文庫論集』11、及び『中國書誌』所収)、及び前掲抽稿を参照。
- (20) 一七家とは前述の11五家に臨濟と竹菴士珪を加える。前提 抽稿参照。
- (21) 中央図書館本『古尊宿語錄』第九巻のうち「古尊宿語錄」の第111紙裏。
- (22) 『近世禪林僧目』廿、15b~16b
- (23) 「東」五祖演禪師語」(天理本)第11紙の裏にみえる左の11偈である。
- 不与万法為伴

一口吸尽西江水。洛陽牡丹新吐藥。簸土揚塵勿處尋。擡頭撞着自家底。

日面仏月面仏

鬚鬢女子画娥眉。鸞鏡台前眼似癡。自說玉顏難比並。却來架上着羅衣。

(24) 「黃梅東山演和尚語錄」の第五二番目の上堂語に左の「**ぐみえ**」とくみえる。

上堂、拳、僧問、趙州狗子還有仏性也無。州云、無。僧云、一切衆生皆有仏性、狗子為什麼却無。州云、為伊有業識在。師云、大衆、你諸人尋常作麼生会。老僧、尋常只拳無學便休。你若透得這一箇字、天下人不柰你何。你諸人、作麼生透。還有透得徹底麼。有則出來道看。我也不要你道有、也不要你道無、也不要你道不有不無、你作麼生道。珍重。(T.47-665b-c)

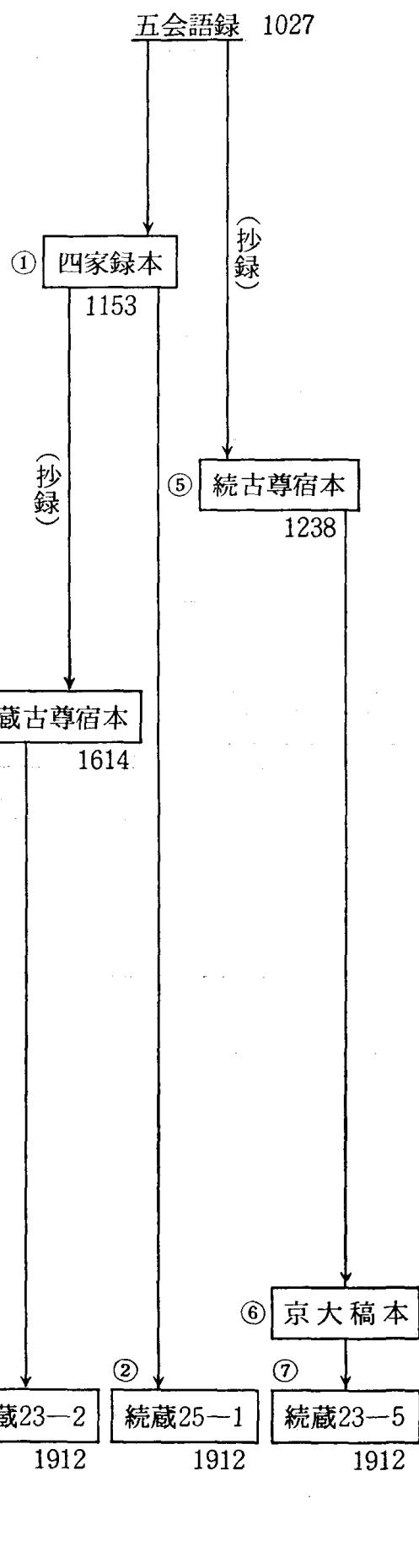
また、同語錄卷末の偈頌の中に「師室中常拳趙州狗子還有仏性也無州云無僧請問師為頌之」と題して左の一首がみえる。
趙州露刃劍。寒霜光燄燄。更擬問如何。分身作兩段。(666b-c)

(25) 『鴻慶集』四11-9a

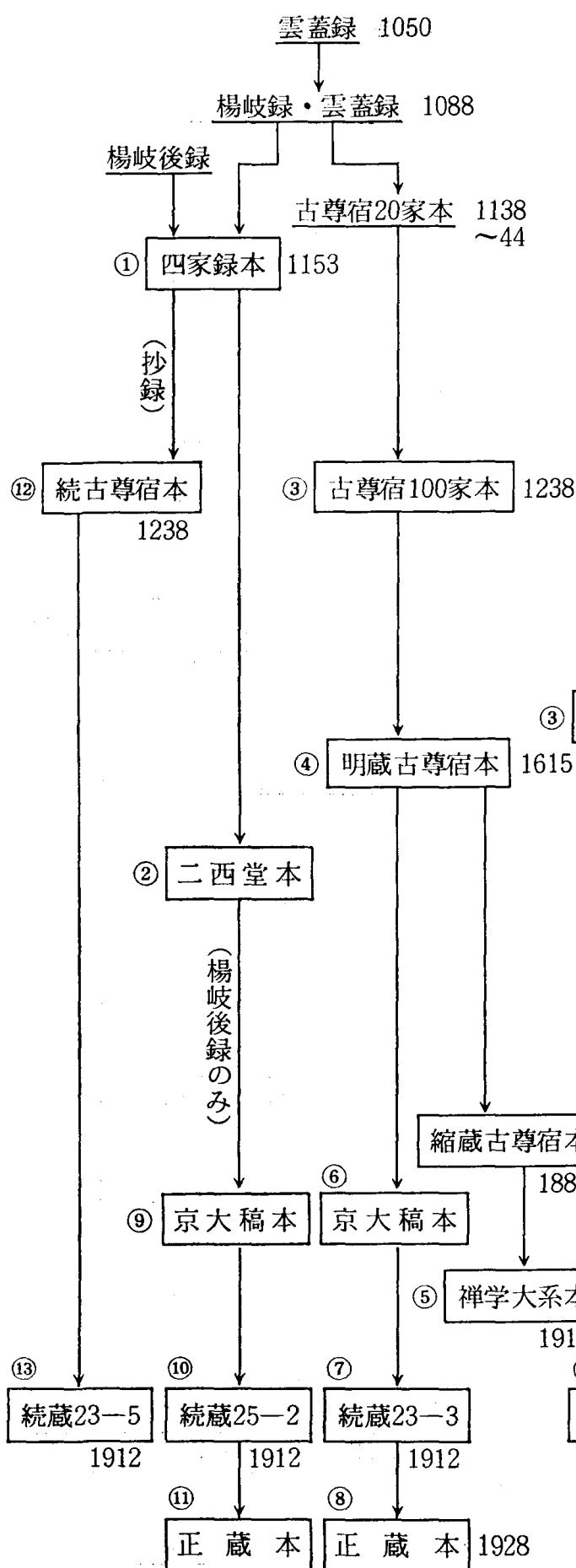
〔慈明四家に関する語録の系統〕

(□は現存本)

1. 石霜楚円



2. 楊岐方会



3. 白雲守端

